

# あゆみ通信

VOL. 202

あゆみの会(真宗大谷  
派大阪教区第2組同朋  
の会推進員連絡協議会)  
会長 細川 克彦  
広報 本持 喜康

## 第41回同朋大会にご参集を

3月7日(土)に、恒例の第2組仏事最初の同朋大会が南御堂で開催されます。

2025年は大阪教区で慶讃YE ARとして、4月には宗祖親鸞聖人御生誕850年・立教開宗800年慶讃法要が開催され、第2組をはじめ、教区の全組から多くのご門徒が参集され、盛大な法要となりました。

今回の第2組同朋大会では、久し振りに、相愛大学音楽部の弦楽四重奏を演奏していただきます。

なお、依頼講師の真城義磨先生が、病氣療養のために入院治療されます。

今回、新進気鋭のご住職で教学研究所の梶哲也先生をお招きすることになりました。ご期待ください。

皆さまのお誘いあわせて、ご参加をお待ちしています。

日時 **3月7日(土) 13:30**  
(13:00から受付)

会場 難波別院同朋会館講堂  
(地下鉄御堂筋線・中央線本町駅下車。⑬出口から南へ)

内容 お勤めと音楽演奏と法話  
演奏 相愛大学弦楽四重奏

講師 梶 哲也先生

(教学研究所助手、大阪教区第27組正念寺衆徒)

参加費 1000円(記念品有)

## 第15回大阪教区全推進員の集い



大阪教区では、教区内の推進員を対象に、年1回「集い」を開催しています。今回は「同朋の会をひろめよう」をテ

マに開催されます。

推進員は、真宗同朋会運動の中で、住職と手を携え、寺を聞法の道場としてひらいていく中核となることを願い誕生しました。推進員のみならず住職をはじめ寺族や有縁のご門徒皆様のご参加をお待ちしています。

なお、今回、意見発表の一人に、第2組からあゆみの会の活動報告を吉田雄彦副会長(法山寺)が報告されます。ご都合のつかれる皆さんは、ぜひご参加ください。

日時 **3月14日(土) 13:30**  
(受付は13:00から)

会場 難波別院 本堂

対象 推進員、住職、寺族、坊守他

内容 お勤め、意見発表(2組、8組、17組、19組) 法話

講師 高間 重光先生

(第19組了信寺前住職)

参加申込 2/10までにお手次の寺院までご連絡ください。

## 紙上法話

## 誕生のころ

金子大榮師

## 終わってから始めへ

私たちがお聖教を読むと言うことは、少なくとも3度以上読まなければならない。と言うことは、まず第一は、ずっと初めから終わりまで読むと言うこと、この読み方は、その書物の思想と言うものは分かるけれども、その精神と言うものは分からない。それから二度読むと言うことは、その読む心は終わりを知っているから、終わってから初めを読むことになる。だからそれで、その書物の精神と言うものが分かる。しかし、それがまだ自分の身につくと言うことに

## 親鸞のことば

## 凡人でも人を救うことができる

じんずうほうべん

## 神通方便をもって、まず有縁を度すべきなり 歎異抄第5条

念仏を称え、すみやかに阿弥陀さまの浄土に生まれ、すべての者を救うことの出来る仏のさとりを得ることが大切である。そうすれば、縁のとても深い者、自分の父や母や子を何よりもまず救うことができる。そう親鸞は述べています。ここには、自力では人を救うことができない悲しみ、そして、そんな身に念仏を与えてくださった阿弥陀さまへの感謝の心が流れています。凡夫がこの世で人を救えると思うのは思い上がり、凡夫が念仏して必ず人を救えるようになるのは誓願(本願)の力だと親鸞は言います。

。(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

## 福は内にあり 鬼も内にあり

昔、難波別院(南御堂)の玄関に掲示板があり、現在の第2組組長の墨林浩住職は、難波別院教務部長また総務部長を歴任されておられ、そして「南御堂新聞」に1996年9月号から11年にわたり、「南御堂の掲示版」を執筆されていました。

標題も、その一つです。

2月の節分には、自身も何の疑問も持たずに、子どもの頃は親としてきましたし、親になってからも子どもが成人するまでやってきました。親鸞聖人の教えを聞いてからは、自分だけが良ければと言う我執にとらわれた行ないであること知らされました。

浄土真宗は、聞法にはじまり、聞法に極まると教えていただきました。聞法第一。(本)

はならない繰り返し三読して初めて、なるほど、自分もこうあらねばならんなあと言うことが出てくる。

これを歴史と言うものの上に置いて考えますと、たとえば仏教の歴史ならば、原始仏教から大乘仏教、それから浄土教と言われている。ですから、仏教とは何ぞやと言え、まずお釈迦さまの原始仏教から、それが展開して大乘仏教、そして、その大乘仏教から浄土教と言うのが普通です。

しかしながら、そうしておる間にも、終わりから初めへ遡っているのがあります。ここにあるいは西洋の仏教研究者と日本の仏教研究者との違いがあるのかも知れません。西洋の仏教研究者は原始仏教の研究ならばただお釈迦さまの説かれたことだけ考えればいいのでありましょう。けれども日本の学者は原始仏教の研究と言いつつ、大乘教と言うものを腹においておられます。だから、どうして大乘仏教が出て来たかとか、どうして浄土教が出て来たか、と言うことを初めから終わりへ読む時に、すでにその心の中では終わりから初めへ読んでいます。したがって、それをはっきり意識して、まず浄土教と言うものがある。その浄土教と言うのはどうして出てきたのかと言うことで大乘教をしらべる。大乘がどうして出てきたのかと言うことで原始仏教をしらべる。こういうことがあるわけでありまして、それでなければ歴史と言うても何事も分かるはずがないのであります。

例えば毛虫が蝶になるということは、毛虫をいくら研究しても分からな

い。けれども蝶になったものを調べて、なるほどこうしてと、毛虫が蝶になったと言っている。けれども、実は蝶を調べて、毛虫に及んだと言うことなんですね。聖教を読むもそのとおりで『教行信証』にいたしましても、前書きと後書きと言うものがあります。総序と言う文は前書きなんです。あの前書きを読んで、そして終わりまで読んだら『教行信証』は分かるか、それとも後序一あとがきを読んで本当に分かるのか、お書きになった祖師にいたしましても、実は、前書きの方があとでお書きになったのかも分かりませんね。それで私の言いたいことはほぼお分かりだろうと思います。今までは報恩講と言うことで、これは初めから終わり、祖師のご誕生からご一生を想うてのものであります。はじめから終わりという方向において、祖師の恩徳を讃えていくほかない。それが私たちの門弟の伝承と言いますか、坊さんたちの仕事でしょうが、信者のよろこびもこれでしょう。ご一生のご苦勞を感謝するところ、名のとおりの報恩講だからね。そのような意味で非常に大切なことだと思います。

### 親鸞の求道心へ

だから、そこへいけば、昔は報恩講だけでした。ですが、それで結構あります。それが今度何故ご誕生と言うことになったかと言うと、

、釈尊に降誕会ということがあ



ら、親鸞にもと言うようなことを、と言うことであっても差し支えないですけれども、何かそうではなく、祖師の出家精神と言うものを明らかにしようじゃないかということ。つまり、結末よりは出発へ、もう一度立ち返る必要があるんじゃないか。それは誰が言い出したか、どういう気運で誕生と言うことを言い出したにしましてもね、出来たのを善意で解釈するということになると、ご誕生の年月日を明らかにするだけでは意味が無いと思うのであります。

われわれもあらためて、祖師の出家精神から学んでいかねばならない、求道心にかえらなければならぬ。祖師ご誕生からご臨終まで出なくて、逆にご臨終から遡って、そうしてこういうことになったということは、こうであつたんだと言うことを見なおしていこうではないか、と言うことが今日、ご誕生と言うものを想うところの一つの意義でないか。そうすることによって、そこで立教開宗の『教行信証』の精神も了解できるに違いないという、先にも申しました三度以上読むことによって、はじめて浄土真宗と言うものが分かるのでしょうか。(続く)

